霾りて墓標のごとく忘らるる

野本　京

蒼生（そうせい）さんに連れられて吟行というものを初体験。高知市の吸江寺（ぎゅうこうじ）。縁側に坐ってぼんやりと庭を眺めるのが好きだったが、退屈してくると裏手にある墓地に足が向く。「じきに暗いところへ行っちゅうねぇ」苦笑する蒼生さんの笑顔を思い出す。「鷹」の初三十句。

昭和五十七年作